

空所化と擬似空所化

竹 腰 敦

1. 序

英語には(1)に示されるような空所化 (gapping) と呼ばれる現象がある。

- (1) a. John studies linguistics, and Bill __ philosophy.
 b. Charley writes with a pencil and John __ with a pen.
 c. John writes poetry in the garden, and Max ___ in the bath-
 room. (Neijt 1979 : 19, Jackendoff 1971 : 24)

空所化とは、等位接続構造において動詞、あるいは動詞と目的語（付加詞）が共通している場合に二番目以降の動詞（と目的語、付加詞）を随意的に省略する現象であり、例えば、(1 a)では二番目の節の studies という動詞が省略されている。

英語には空所化によく似た現象で(2)のような擬似空所化 (pseudo-gapping) と呼ばれる現象もある。

- (2) a. I'm sure I would like him to eat fruit more than I would
 __ cookies.
 b. I think you need to show yourself more than you do __ anyone
 else.
 c. I don't care for the paragraph so much as I do __ the individual
 lines.
 d. If you don't believe me, you will __ the weatherman.

(Levin 1980 : 15-17)

擬似空所化とは、助動詞を残して動詞が省略される現象である。

空所化と擬似空所化の最も大きな違いは、空所化が等位構造でのみ容認され、従属構造では容認されないのに対して、擬似空所化は逆に従属構造でのみ容認され、等位構造では容認されないということである。

(3) 空所化

- a. *Mary met Bill at Berkeley although Sue ___ at Harvard.
b. *Fred voted for Clinton because Tom ___ Bush.

(Lobeck 1995 : 22)

(4) 擬似空所化

- a. *John has written the words, and Paul will/is ___ the music.
b. *Tom will smoke the grass, and Reuben might/has/is ___ the hash.

(Jackendoff 1971 : 23)

空所化と擬似空所化のもう1つの相違は、(5)のように先行詞が同一発話内になければ空所化は起こらないのに対して、(6)のように先行詞が同一発話内になくても擬似空所化は起こるということである。

(5) 空所化

Speaker A : Did Sam go to the store ?

Speaker B : *No, Bill ___ to the supermarket.

(Williams 1977 : 102)

(6) 擬似空所化

Speaker A : That milk wouldn't help me at all.

Speaker B : It will ___ me. (Levin 1980 : 17)

本稿では、空所化と擬似空所化の空所は他の省略現象 (VP 削除、N' 削除、間接疑問縮約 (sluicing)) における空所と同様に Lobeck (1993, 1995) の提案する省略認可原理 (The Ellipsis Licensing Principle) によって認可されるという仮定に基づき、このような空所化と擬似空所化の振る舞いの相違がなぜ生じるのかを考察する。

以下、次のように論を進める。まず、Lobeck (1993, 1995) の省略認可原理の概要を示すために第2節を置く。続く第3節では、空所化の空所は対比要素

が外置された結果残された IP であり、等位接続詞によって省略認可原理が満たされていることを示す。第 4 節では、擬似空所化の空所は、対比要素が外置された結果残された VP であり、典型的な VP 削除と同様に INFL によって認可されていることを示す。またこの節では、擬似空所化の空所の認可子が等位接続詞ではないという事実を指摘するとともに、擬似空所化が従属構造でのみ許されることを説明するための原理を提案する。第 5 節は結語である。

2. Lobeck (1993, 1995) の省略認可原理

Lobeck (1993) は、VP 削除 (VP deletion)、N' 削除 (N'deletion)、間接疑問縮約 (Sluicing) の認可条件として (7) に示される省略認可原理 (The ellipsis licensing principle) を提案している。

(7) The ellipsis licensing principle (ELP)

An ellipsis must be governed by an X-0 specified as [+Plural], [+Poss], [+Tense, +AGR], or [+WH]. (Lobeck 1993 : 778)

(7) は基本的には省略によって生じる名詞以外の空範疇に空の代名詞 (pro) の認可条件である (8) を応用したものである。¹

(8) Licensing and identification of empty pronominal :

An empty nonarbitrary pronominal must be governed by X-0 specified for strong agreement. (Lobeck 1993 : 779)

この (8) における強い一致 (Strong agreement) は、(9) のように定義される。

(9) Strong agreement :

An X-0 is specified for strong agreement iff

- (i) the X-0, or a phrase or head coindexed with it, is specified for agreement and
- (ii) agreement is morphologically realized on X-0 or on the phrase or head coindexed with it. (Lobeck 1993 : 784)

この定義からわかるように、強い一致には (7) の [+Plural]、[+Poss]、[+Tense, +AGR]、[+WH] といった素性が関与している。したがって、(7) は

(10)のように言い換えることができる。

- (10) An ellipsis must be governed by an X-0 specified for strong agreement.

それでは次に Lobeck の仮説がどのようなものであるか具体例を見てみよう。まず、(11)の VP 削除を見てみよう。

- (11) Because [_{IP} Pavarotti couldn't [_{VP} e]], they asked Domingo to sing the part.

(11)の could は INFL を占め、主語と一致する素性 [+Tense, +AGR] を持っている。空所 e は could に統率されており、(10)の条件を満たしている。

また、(12)のような N' 削除の場合には、DP の主要部 D を占める 's が空所を統率しており、(10)を満たしている。

- (12) Although John's friends were late to the rally, [_{DP} Mary's [_{NP} e]] arrived on time.

さらに、(13)の間接疑問縮約の場合も空所が [+WH] で一致する C によって統率されている。(この場合、強い一致の条件である一致の形態的具現は CP-Spec を占める who によって満たされている。)

- (13) We want to invite someone, but we don't know [_{CP} who [_{IP} e]].

以上をまとめると、省略現象における空所は、指定辞要素と一致する主要部に統率されることによって認可されるということになる。

3. 空所化

Lobeck (1995: 21 ff) は、空所化は第2節で見た省略現象とは異なった振る舞いをするとして、それを省略現象の研究対象からはずしている。² しかし、空所化が省略現象であることは明らかであり、空所化も省略認可原理によって認可されることが望ましい。そこで本節では、空所化の空所も省略認可原理によって認可されるという仮説に基づいて空所化の分析を行う。ここで問題となるのは、空所化で生じる空所の範疇が何であるかということと、その空所を認可する主要部が何であるのかということである。

まず、空所化で生じる空所の統語範疇が何であるかを考えてみよう。(1)は、空所化の空所が必ず動詞を含むことを示している。

(1) a. John studies linguistics, and Bill __ philosophy.

b. Charley writes with a pencil and John __ with a pen.

(14)は、空所化の空所が INFL 節点をも含むことを示している。(14 a)では INFL を占めると考えられている助動詞が残されており、その結果、(14 a)は非文となっている。³

(14) a. *John has written the words, and Paul will/is __ the music.

b. John has written the words, and Paul __ the music.

(15)は、動詞の目的語、付加詞が空所化の空所に含まれてもよいことを示している。この場合も、動詞と INFL は必ず削除される。

(15) a. John writes poetry in the garden, and Max __ __ in the bathroom.

b. Charlie went into the bathroom at 5 : 30, and Lola __ __ at 5 : 31.

(Jackendoff 1971 : 24)

以上の事実から空所化の空所は INFL と動詞を必ず含まなければならず、さらに、場合によっては動詞の目的語、付加詞を含んでもよいことがわかる。これらの要素すべてを含む可能性のある範疇としては IP しか考えられない。⁴ そこで、空所化の空所の統語範疇は IP であると仮定してみる。しかし、そうすると、IP が省略されたにもかかわらず IP 内の要素が残存するのはなぜかという疑問が生じる。例えば、(1 a)において、Bill と philosophy は IP 内要素であるにもかかわらず省略されずに残存しているが、なぜこのようなことが起こるのだろうか。この現象は次のように説明されよう。すなわち、(1 a)では、主語と目的語は(16)のようにそれぞれ左方と右方へ移動しており、最も内部の IP₆ が省略されていると見なすのである。

(16) [_{IP1} John_i [_{IP2} [_{IP3} t_i studies t_j]linguistics_j]] and [_{IP4} Bill_k [_{IP5} [_{IP6} t_k studies t_l]philosophy_l]]

削除された IP₆ は、LF においてその先行詞 IP₃ によって復元される。IP₃ と IP₆ では痕跡の指標が異なっているが、痕跡には略式の同一性の読み (sloppy iden-

tity reading) があるため、(16)の IP₆ の痕跡はその先行詞の指標まではコピーすることはなく、正しい解釈が得られる。話題化の痕跡は変項であり、右方移動の痕跡は、Pesetsky (1985) によると照応形である。変項にも照応形にも略式の同一性の読みがあることは(17)、(18)に示されているとおりでである。⁵

(17) Bagels, I like. Donuts, I don't __. (Kennedy 1994 : 27)

= Bagels_i, I [_{VP} like t_i]. Donuts_j, I don't [_{VP} like t_j].

(話題化：痕跡は変項)

(18) John was seen and Bill was __, too. (Williams 1977 : 132)

= John_i was [_{VP} seen t_i] and Bill_j was [_{VP} seen t_j], too.

(受け身：痕跡は照応形)

空所化の残置要素が移動していることを示す証拠としては、空所化を含む文は移動の特徴を示すことが挙げられる。⁶ まず、(19)を見てみよう。一般に PP 内からの NP の右方への外置は禁止される。

(19) a. John talked t_i about the exam [to one of his classmates who is very smart]_i.

b. *John talked to t_i about the exam [one of his classmates who is very smart]_i.

(20)のように空所化を含む文では PP に含まれる NP だけが残存することはできない。

(20) a. Jim was hassled on Winthrop street, and Norma was hassled on Hooker Street.

b. *Jim was hassled on Winthrop street, and Norma __ Hooker Street.

c. Jim was hassled on Winthrop street, and Norma __ on Hooker Street. (Sag 1976 : 268)

(20 b)が(21)のように外置を受けた後、最も内部の IP が削除されたとすると、(19 b)を排除する原理によって(20 b)も排除することができる。

(21) Jim was hassled on Winthrop street, and [_{IP} Norma_i [_{IP} [_{IP} t_i was hassled on t_j] Hooker Street_j]]

第二に、一般に節が移動する場合、それは、that に導かれていなければならない。これは右方移動と左方移動の両方に言えることである。

- (22) a. *(That) Tom is dishonest, I found hard to believe.
 b. I have believed since 1939 *(that) I would win the Irish Sweepstakes. (Bresnan 1976 : 494)

(23)のように、空所化の残置要素も that に導かれていなければならない。(23)も空所化の派生に移動が関与していることを示している。

- (23) Mary believes (that) Tom is dishonest, and Susan, *(that) he is dumb. (ibid.)

第三に、一般に移動する要素は最大投射でなければならないが、(24)のように空所化の残存要素も最大投射でなければならない。

- (24) *Bill read his father's exciting new book, and Alan __ boring old one. (__ = read his father's) (Sag 1976 : 200)

空所化の残存要素が移動しているとすると、(24)は、非最大投射である boring old one の移動が許されないため排除される。

これまで空所化の文の残存要素は右方外置、話題化を受けているということを見てきたが、なぜ空所化の残存要素が外置、話題化を受けなければならないのだろうか。その答えは、and の前後の節中の要素の対比を強調するためである。外置、話題化された句は焦点要素となり、それに強勢が置かれることはよく知られている。もし(25)のように対比を含まない場合には、外置を受けることがないので空所化を受けることはできない。

- (25) a. *John studies linguistics, and Bill linguistics.
 b. *John studies linguistics, and John philosophy.

以上をまとめると、空所化とは、外置、話題化を受けた構造の最も内側の IP が省略される現象であると言えよう。この仮説は次の例のように空所が2つに分断された事例の説明も容易にする。

- (26) a. Arizona elected Goldwater Senator, and Pennsylvania __ Schweiker __.
 b. Max writes poetry in the bathroom, and Schwarz __ radical

pamphlets ___. (Jackendoff 1971 : 24)

ここでの仮定、すなわち、空所化の空所は対比要素が移動した結果残された IP であるという仮定に基づいて、(26)を分析すると、2つの残置要素が移動して残された IP が削除されたということになり、実際に削除されるのは1つの IP 節点だけである。一方、上の仮定に基づかないで(26)を分析すると、2つの空所をそれぞれ独自に生み出さなければならなくなるため、この事例の説明は困難になる。

続いて、第二の問題、すなわち、何が空所化の空所を認可するかについて考えてみよう。第2節で見た VP 削除、N' 削除、間接疑問縮約では指定辞要素と強い一致をする機能主要部、すなわち、I⁰、D⁰、C⁰ がこれらの空所の認可子であるということであった。(3)の事実、すなわち、空所化は等位構造のみに限られ、従属構造では見られないという事実は、この問題に対して直接答えを与えてくれる。(3)を(27)として示す。

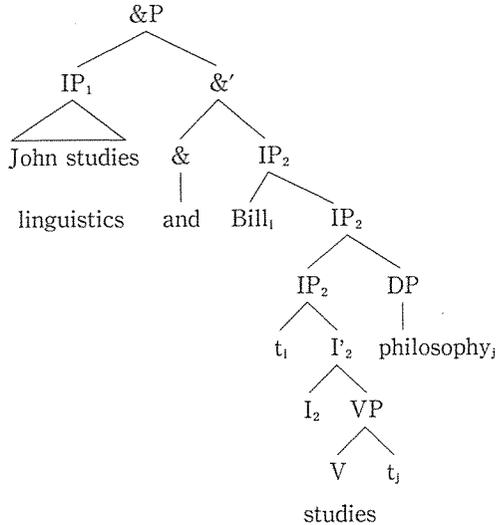
(27) a. *Mary met Bill at Berkeley although Sue __ at Harvard.

b. *Fred voted for Clinton because Tom __ Bush.

(Lobeck 1995 : 22)

この事実は、空所化の認可において等位接続詞が重要な働きを果たしていることを示している。そこで、空所化の空所を認可する要素は等位接続詞であると仮定してみよう。本稿では、Larson (1990)、Munn (1992)、Kayne (1994) 等に従い、等位構造は等位接続詞を主要部とする2項枝分かれ構造であると仮定する。このように仮定すると、(1 a)の空所化が適用される前の構造は(28)となる。

(28)



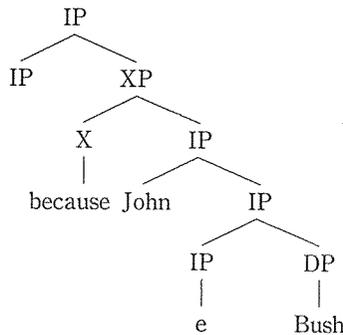
空所化が起こった(1 a)は、(28)の最下位の IP_2 が削除されて派生される。(28)において&は最も内側の IP_2 の削除によって生じる空所を統率している。しかし、&は(7)の強い一致の要求を満たすための素性として具体的に挙げられている [+Plural]、[+Poss] 等とは関係がない。しかし、Lobeck の主張の要点は、空所の認可子には一致があり、それが形態的に具現するということであり、(7)は(10)のように言い換えられることを見た。したがって、&が強い一致をする要素であれば、空所化の空所は省略認可原理を満たすことになる。Johannesen (1994) は、等位接続詞はその指定辞位置にある要素と範疇素性等で一致すると主張している。その結果、(29)のように DP を指定辞に含む &P は DP として機能する。

(29) [_{DP} [_{DP} John][and [_{DP} Bill]]]studied linguistics.

したがって、(28)の&は範疇素性で指定辞位置の IP と一致している。また、&P の指定辞要素は形態的に具現しており、(9-ii)の強い一致の条件を満たしている。

以上の仮定によって、第1節で見た空所化の事実、すなわち、空所化は等位構造でのみ許され、従属構造では許されないという事実が説明される。等位構造は(28)のような構造をもち、指定辞要素と範疇素性で一致する等位接続詞が空所を統率することによって空所は省略認可原理を満たしている。一方、(27b)のような従属構造は(30)のような構造をもつと考えられる。従属接続詞の統語範疇は定かではないので、ここではXPと表しておく。

(30)



(30)において because は空所を統率しているが、従属接続詞は一致をする要素ではないため、空所認可の条件である強い一致をする要素による統率はなされていない。したがって、(30)の空所は省略認可原理を満たしておらず、認可されないことになる。⁷

最後に、空所化の空所の先行詞が同一の発話内になければならない理由について考えてみよう。

(6) Speaker A : Did Sam go to the store ?

Speaker B : *No, Bill to the supermarket.

(6 B)は等位構造に埋め込まれているわけではない。したがって、空所化の空所の認可子が存在しないことになるので(6 B)は容認されない。⁸

第3節の議論は次のようにまとめられる。空所化を受けた文では、等位接続詞によって接続されている2つの節において対比されている要素は外置されて

おり、その結果残された最も内部の IP が省略されている。そして、その空所は等位接続詞によって統率されることによって省略認可原理を満たしている。したがって、空所化の空所（すなわち、空の IP）を認可するためには等位接続詞が必要であり、空所化は等位構造でのみ許されることになる。

4. 擬似空所化

第3節における主要な論点、すなわち、空所化の残置要素は移動を受けた要素であるという提案は擬似空所化の分析にも応用できる。なぜならば、擬似空所化の残置要素も何らかの要素と対比されているからである。実際、擬似空所化も空所化と同様に移動の特徴を示す。まず第一に、擬似空所化の残置要素は最大投射でなければならない。

- (31) *Mary loves her father more than Susan does __ mother. (__ =love her)

擬似空所化の残置要素が移動しているとする、(31)は非最大投射が移動しているので排除される。

擬似空所化に見られる外置の特徴の第二点目は、PP に含まれる NP だけが残置することはできず、PP 全体が残置しなければならないという点である。⁹

- (32) a. ? Probably have a better time with them than you would __ your own family.
 b. ? I don't care for the paragraph so much as I do __ the identical lines. (Levin 1980 : 19)

(32)が容認されないのは、PP 内からの NP の右方外置が許されないためである。

ではここで、擬似空所化の空所の範疇が何であるのかを考えてみよう。空所化では INFL 要素である助動詞が残置することは許されないが、擬似空所化では、逆に助動詞が残置しなければならないため、擬似空所化の空所は IP とは考えられない。そこで、擬似空所化で削除される範疇は外置された要素の痕跡を含む VP であると仮定する。例えば、(33)は(34)の VP が削除されることによ

て派生されるとする。

(33) She wrote to her parents more often than he did ___ to his brother.

(34) ... than [_{IP1} [_{IP2} he_i [_{IP3} t_i did [_{VP} wrote t_j]]]to his brother_j]].

(34)において、IP₃を削除することはできない。なぜならば、その結果生じる空所が一致をする主要部に統率されず、主要部認可原理を満たすことができないからである。これに対してVPは、INFLのdidに統率されており、削除されても省略認可原理を満たすことができる。擬似空所化の空所を認可する要素はINFLであるので等位接続詞によって認可される空所化と違い、従属構造に生起することが可能である。また、同じ理由によって空所が先行詞と同一の発語内にある必要はない。

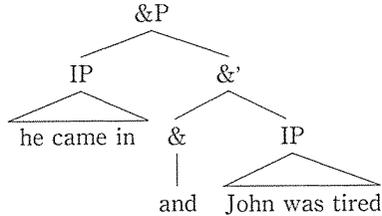
しかし、擬似空所化を認可する要素がINFLであるとする、擬似空所化はなぜ等位構造では許されないのであろうか。例えば、(35)の等位構造において、擬似空所化はなぜ許されないのだろうか。(35)の空所はINFLによって統率されているので省略認可原理に抵触することはないはずである。

(35) *John has written the words, and Paul will [_{VP} e]the music.

この事実は、省略の空所も一種の代名詞であり、束縛条件Bに従っていると仮定することによって説明される。第2節で、省略認可原理は、空の代名詞proの認可条件を省略によって生じる空所に応用したものであることを見た。つまり、省略によって生じる空所は代名詞と同様の原理によって認可されていることになる。よって、省略によって生じる空所が代名詞と同様の振る舞いをするということは決して不自然なことではない。ただし、IPが等位接続された構造への束縛条件の適用方法は少し特殊である。本稿では、Larson (1990)に従うことにする。(35)の説明の前にその考え方を束縛条件Cを例にとって見てみよう。等位構造は等位接続詞を主要部とする2項枝分かれ構造であるという仮定のもとでは(36)は(37)の構造を持つことになる。

(36) *He_i came in and John_i was tired.

(37)



(37)のようにIPが等位接続された構造において、指示表現を含むIPは、その指示表現と同一指示の句を含むIPにC統御されてはならないと仮定することによって、(36)を束縛条件Cの違反として排除することができる。

この考えを束縛条件Bに適用すると、束縛条件Bは、代名詞類を含むIPはその統率範疇内でその代名詞類と同一指示の句を含むIPにC統御されてはならないと定義される。さらに、統率範疇は、代名詞類を含むIPを支配する最初のIPであると定義する。これらの定義に従って、(35)の構造である(38)を見てみよう。

(38) [_{&P} [_{IP₁} John has written the words][_{&'} and [_{IP₂} Paul will [_{VP} e]the music]]].

空のVPを含むIPを支配する最初のIPは&Pであり、&Pが統率範疇となる。なぜならば、&Pの主要部は主要部—指定辞一致によって指定辞のIPと一致し、&PはIPとして機能しているからである。空のVPを含むIP₂はその統率範疇内でIP₁にC統御されているので、(38)は束縛条件Bの違反として排除される。

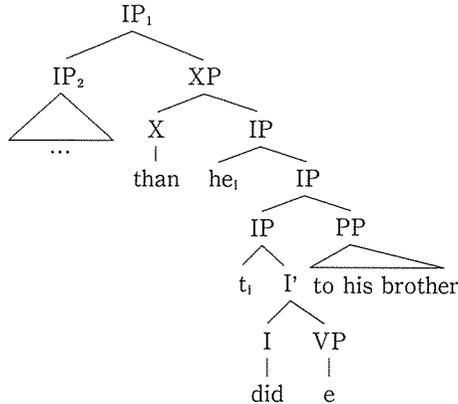
これに対して、等位構造でIPが削除され空所化が起こった(39)では束縛条件の違反は生じない。

(39) [_{&P} [_{IP₁} John has written the words][_{&'} and [_{IP₂} Paul [_{IP₃} [_{IP₄} e]the music]]]]].

(39)では等位接続されているIPそれ自体が空所となっているので、この空所を含むIPに相当するのは&Pである。ここでも&PはIPとして機能しているからである。よって、この&Pが空所の先行詞を含むIP(あるいはIPとして機能している&P)にC統御されるとき、束縛条件Bの違反が生じる。(39)では&Pは何物にもC統御されていないので束縛条件の違反は生じず、(39)は容認される。

続いて、従属構造で擬似空所化が起こった(40)を見てみよう。

(40)



(40)の空のVPを含むIPはその先行詞を含むIPにC統御されていない。なぜなら、C統御できる要素は範疇であるが、IP₂は分節であるからである。したがって、従属構造では、VPの削除である擬似空所化も束縛条件の違反を引き起こすことはない。

ここで注意が必要なことは、注8で述べたように、andには等位接続詞としての用法と副詞としての用法の2種類があるということである。(41)のandは副詞としてのandであり、束縛条件は等位構造における特例的な適用のされ方はされず、代名詞の統率範疇はIP₂となり、(41)が束縛条件Bによって排除されることはない。

(41) a. [_{IP1} John_i came in][_{IP2} and he_i was tired]

b. [_{IP1} John came in][_{IP2} and Bill did [_{VP} e]]

andには2種類あることは、(42)には、第一の節と第二の節が意味的に対等である読み(等位接続詞の場合)と前者が後者の原因となっている読み(副詞の場合)の両方があることによって支持される。これに対して、空所化が起こった(43)では(42)で可能なandの前の節が後の節の原因となっているという読みはない。

(42) Sue became upset and Nan became downright angry.

(43) Sue became upset and Nan __ downright angry.

(Kehler 1994 : 1)

(43)は副詞の and ではなく等位接続詞の and が空所化の空所を認可するという本稿での主張を支持している。

5. 結語

本論では空所化と擬似空所化の相違を明らかにした。空所化とは対比要素が外置され、残された最も内部の IP が省略される現象である。そして、その空所は等位接続詞によって統率されることによって省略認可原理を満たしている。したがって、空所化は等位構造でのみ許される。一方、擬似空所化とは、対比要素が外置され、残された VP が省略される現象である。したがって、擬似空所化は VP 削除の一種であり、INFL 要素に統率されることによって認可される。したがって、擬似空所化は従属構造でも許される。擬似空所化が等位構造で許されないのは、省略によって生じる空所も代名詞類であり、束縛条件 B に従っているからである。¹⁰

注

- 1 Lobeck (1995) は、省略で生じる空所も pro であると主張し、省略によって生じる空所も (8) によって認可されると主張している。しかし、本稿では省略によって生じる空所と pro は異なるものであるという立場に立ち、(7)を(8)とは別の原理とする。
- 2 Lobeck (1995) は、空所化と VP 削除の相違を(i), (ii)のようにまとめている。
 - (i) 空所化
 - a. 空所はその先行詞に先行できない。
 - b. 空所は等位構造に生起しなければならない。
 - c. 空所はその先行詞と同じ発話内に生起しなければならない。
 - (ii) VP 削除
 - a. 空所はその先行詞に先行できる。

b. 空所は等位構造にも従属構造にも生起できる。

c. 空所はその先行詞と別の発話内に生起できる。

(i-b, c)に対する説明は本稿で与えられている。(ia)の問題も本稿での仮説によって説明が可能である。(竹腰(準備中)を参照。)

- 3 (14 a)は助動詞が生起している点に注目すると擬似空所化であり、擬似空所化が等位構造で許されないことを示す例であると解釈することも可能であるし、等位構造に生起している点に注目すると空所化であり、空所化が助動詞の生起を許さないことを示す例と解釈することも可能である。ここでは、後者の解釈をしている。
- 4 等位接続詞によって接続されている範疇はCPでなくIPであることは(i)に示されている。

(i) a. *Betsy said that Alan went to the ballgame, and that Betsy ___ to the movies.

b. *Did Bill eat the peaches or did Harry ___ the grapes ?

(Sag 1976 : 194, 276)

- 5 Sag (1976)、Williams (1977) は(i)のような例を挙げ、変項には略式の同一性の読みはないと主張している。

(i) *John, who Bill saw, and who Bob did too.

(ii) *John, who_i Bill [_{VP1} saw t_i], and who_j Bob did [_{VP2} see t_i] too

Williams (1977 : 131)によると、変項には略式の同一性の読みがないため、VP₂内で復元された痕跡の指標はiとなる。するとこの変項はwho_iの作用域内にないため束縛されることがないので排除される。しかし、(17)のような例が存在するし、また、(ii)のVP₂内の痕跡の指標がjであってもwho_jがJohnにR束縛されないのて排除可能である。(R束縛についてはSafir (1986)を参照。)

- 6 さらなる証拠として、1つの文で3つの要素を残置することができないことが挙げられるようにも見える。

(i) *John sent Mary a dress and Bill ___ Susan a ring.

(i)の後ろ2つの残置要素が右方外置しているとすると、(i)は、1つの文で2つの要素が右方外置することを禁ずる原理によって排除される。(ii)のように、一般に1つの文で2つの要素が右方外置することは禁じられる。

(ii) a. *It proved to the jury his guilt that John was seen with the murder weapon.

b. It proved his guilt to the jury that John was seen with the murder weapon.

(Stowell 1981 : 216)

しかしながら、(iii)のように3つの要素が残置することができる例もある。

(iii) Peter talked to his boss on Tuesday and Harry ___ to his supervisor on Monday.

したがって、(i)は(ii)を排除する原理によって排除されるのではないであろう。おそらく、(i)が排除される理由は、英語のように名詞の形態的格が豊かでない言語では、2つ以上の名詞が連続して残置することができないためであろう。一方、(iii)のように残置要素がPPの場合には、前置詞が形態格的機能を果たし、3つの要素の残置が許される。同様に、名詞の格が形態的に具現される日本語では(i)に対応する例が許される。

(iv) ジョンはメアリーにドレスを、ビルはスーザンに指輪を送った。

7 ここでの仮説に従うと、&の補部となるIPすべてが削除された(i)が派生されてもよいことになるが、(i)が派生されることはない。

(i) *John studies linguistics and ___ .

(i)は、おそらく&の指定辞と補部が完全に音声的に空であることを排除する原理によって排除されるのであろう。

8 (i)にはandが生起しているが、空所は認可されない。

(i) Speaker A : John Likes fish.

Speaker B : *Yes, and Mary ___ meat. (Lobeck 1995 : 25)

(iB)ではandの指定辞要素が存在しない。したがって、一致する要素が形態的に具現しておらず、(9 ii)の条件が満たされていないので省略認可原理が満たされることはない。(iB)のandは副詞に分類されるべきであろう。この種のandはthenと置き換えが可能である場合が多い。

9 Levin (1980 : 19) は、(32)を容認する話者もいることを指摘している。

10 本稿では、GB理論の枠組みで分析を行った。近年のミニマリストプログラムを採用すると、そこでは統率という概念は破棄されているため、(10)は何らかの言い換えが必要となる。ミニマリストプログラムにおいても主要部-補部の関係は有意な関係であるとされているので、(10)は主要部-補部関係を用いて言い換えられるであろう。

参考文献

Borsley, R. (1994) "In defense of Coordinate Structures," *Linguistic Analysis* 24,

218-246.

- Bresnan, J. (1976) "Nonarguments for Raising," *Linguistic Inquiry* 7, 485-501.
- Ishii, Y. (1983) "Pseudogapping as a Syntactic Blend," *Studies in English Linguistics* 11, 40-58.
- Jackendoff, R. (1971) "Gapping and Related Rules," *Linguistic Inquiry* 2, 21-34.
- Johannessen, J. B. (1993) *Coordination : A Minimalist Approach*, Doctoral dissertation, University of Oslo.
- Kayne, R. (1994) *The Antisymmetry of Syntax*, MIT Press, Cambridge, Massachusetts.
- Kehler, A. (1994) "A Discourse Processing Account of Gapping and Causal Implicature," ms. Harvard University.
- Kennedy, C. (1995) "Argument Contained Ellipsis," ms. University of California.
- Larson, R. K. (1990) "Double Objects Revised : Reply to Jackendoff," *Linguistic Inquiry* 21, 91-106.
- Levin, N. S. (1980) *Main Verb Ellipsis in Spoken English*, Doctoral dissertation, Ohio State University.
- Lobeck, A. (1993) "Strong Agreement and Identification : Evidence from Ellipsis in English," *Linguistics* 31, 777-811.
- Lobeck, A. (1995) *Ellipsis*, Oxford University Press, Oxford.
- Munn, A. (1992) "A Null Operator Analysis of ATB Gaps," *The Linguistic Review* 9, 1-26.
- Neijt, A. (1979) *Gapping*, Foris, Dordrecht.
- Nozawa, H. (1978) "On Comparative Ellipsis," *Studies in English Literature*, English Number 55, 319-337.
- Pesetsky, D. (1985) "Morphology and Logical Form," *Linguistic Inquiry* 16, 193-246.
- Pinkham, J. (1982) *The Formation of Comparative Clauses in French and English*, Doctoral dissertation, Harvard University.
- Sag, I. (1976) *Deletion and Logical Form*, Doctoral dissertation, MIT.
- Stowell, T. (1981) *Origins of Phrase Structure*, Doctoral dissertation, MIT.
- 竹腰 敦 (準備中) "日本語と英語の空所化"
- Williams, E. (1977) "Discourse and Logical Form," *Linguistic Inquiry* 8, 101-139.

Synopsis

Gapping and Pseudo-gapping

By Atsushi Takekoshi

This paper is an attempt to distinguish gapping in (1) from pseudo-gapping in (2) in terms of the ellipsis licensing principle given in (3), which is presented in Lobeck (1993, 1995).

- (1) a. John studies linguistics, and Bill ___ philosophy.
 b. Charley writes with a pencil, and John ___ with a pen.
 c. John write poetry in the garden, and Max ___ in the bathroom.
- (2) a. I'm sure I would like him to eat fruit more than I would ___ cookies.
 b. I don't care for the paragraph so much as I do ___ the individual lines.
 c. A : That milk wouldn't help meat all.
 B : It will ___ me.
- (3) The Ellipsis Licensing Principle (ELP)

An ellipsis must be governed by an X-0 specified for strong agreement. Gapping has a superficial resemblance to pseudo-gapping. (The only superficial difference is whether an auxiliary occurs or not.) But it is well-known that the behaviors of gapping and pseudo-gapping are quite different. ① Gapping is allowed only in coordinate structure while pseudo-gapping is allowed only in subordinate structure. ② A gap of gapping and its antecedent must occur in the same utterance, while a gap of pseudo-gapping can be in separate utterance from that containing its antecedent. These differences are explained by the following assumptions.

- (4) a. Gapping is incomplete IP deletion.
 b. The licenser for a gap of gapping is a coordinator.
- (5) a. Pseudo-gapping is incomplete VP deletion.
 b. The licenser for a gap of pseudo-gapping is an INFL element.

The deletion is incomplete, in that it leaves remnants. The remnants are extraposed before deletion applies. Since the licenser for a gap of gapping is a coordinator, the distribution of gapping is restricted in coordinate structure. On the other hand, since the licenser for a gap of pseudo-gapping is not a coordinator, the distribution of pseudo-gapping is not restricted in coordinate structure. Furthermore, we predict that pseudo-gapping can occur in all contexts, as far as the gap meets ELP. However, as I pointed out above, pseudo-gapping is not allowed in coordinate structure. The binding condition B explains this fact because an ellipsis can be regarded as an empty pronominal.